



れないと思うと少々残念ではある。

今西文庫を概観すると、和文単行本には人類学、文化論、生態学や環境関係以外に国内外の山関係の書が多い。深田久彌の“日本百名山”を含め“シルクロードの旅”や“ヒマラヤの高峰・上下”など「山の文学全集」が揃っている。雑誌類も「山岳」、「岳人」の他、「季刊人類学」が備わっている。洋書も進化論関係や民族学あるいは山岳関係の書、植物生態学、探検や調査に関する地理や紀行文等の書物が集められている。

この今西文庫には青い色の装丁を施した一連の書籍が書棚の一角を占めている。これらは「奥アマゾン探検隊第1次隊報告書」、「南アルプスの森林植生」、「ヒマラヤ関係図書目録」といった現地調査の報告書や資料集である。海外調査のものだけでなく、岐阜県に関するものもある。「奥美濃ノート」があって、驚いたことにその隣に「飛騨地域における農林畜産複合化への道」があった。これは、1981年に岐阜県の依頼を受けて、岐阜大学が石川達芳教授をリーダーとして、農学部の手教員達が分担して飛騨地域を駆け巡り、現地で地元関係者と論議・連携しながら“飛騨の明日を夢見て”描いた懐かしのフィールドワークの書である。共著者の名前を見た時、精力的に現地調査をした過去の日々とメンバーの顔が思い出された。しかし、当時12人いたメンバーの殆どが今はもう大学にはいない。このうちの一人で人生観を語り合い、励まし合い、共同研究した学兄の林進教授もこの3月末で定年退官される。改めて時の流れの速さに感慨無量の思いがする。この書が今西文庫の書架の一隅に、かつての灰色の表紙から青い装丁で衣替えして納められていることに私は少々嬉しい思いがした。

この青い装丁書の隣の書棚にも“抜刷集”として整理されたフィールドワークの書が並ぶ。これらは多くの研究者達から今西錦司先生への寄贈書である。

文庫にある単行本の背表紙文字をぼんやりと目で追っていると、いつしかこれらの文字が自分の海外調査の思い出と重なってくる。

南米コロンビアでの野生インゲンマメの探索調査だった。日が暮れた暗黒のアンデス山中を車で移動していた時のこと。余りにも遠い目的地に心身とも疲れ、次第に不安がついていった。幾つ目かの山越えをした時、突然、空の一角が明るくなった。そして峠の真下には煌々と輝く街灯があたかも真珠の首輪のように連なって闇夜の中で光り輝いていた。その幻想的で美しいイルミネーションに思わず感嘆した、あの夜景。

中米グアテマラでは目的地のアテラン湖の手前まで来た時、巨大な落石が5mの道幅を塞いでいて前進できなかった。ガソリンも尽きかけて途方にくれていたわ

れわれの前に反対側にある町の方から手にスコップを持った人達がトラックの荷台で手を振りながら救援に来てくれた。彼らは岩の上からハンマーで岩を叩き始めた。驚いたことにそれほど時間もかからないうちに岩は砕かれて谷へ落とされた。われわれ日本人調査隊を乗せた4輪駆動車が彼らの前を通った時、大歓声が起こったあの日の出来事。

アフリカ・ガーナでは、隣国ブルキナ・ファソに近い北の国境の町、ボルガタンガに日本人とした始めて入ったその日の帰り、夜中の1時まで車で走り続けてタマレに在るゲストハウスに着いた。その広い庭に出て夜空を仰いだ時、何一つ障害物の無い満天の空にこれほど多くの星々が存在していたのかと宇宙の壮大さに感動したこと。

それからもっと昔、大学紛争の最中、京都大学東南アジアセンターの派遣留学生として大学院博士課程の1年半をマレーシアのテロチェンガイ稲作試験場で過ごした時のこと。その農業試験場で、高校を出たばかりで私の研究助手をしていていたシャルディンとの研究三昧の日々は、それまでで私が始めて人生の幸せを実感した瞬間でもあった。ある朝、降雨後に思いがけない単車の転倒事故を起こした時、いやというほどアスファルト地面に腹部をたたきつけられて息ができず、声が出なかった。その時、頭上を回転して落下した単車の向こうで倒れたまま必死で私を呼ぶシャルディンを見た瞬間、自分でも驚くほど気丈になった。血の出ている自分の足を腰の日本手ぬぐいを裂いて止血し、急ブレーキを踏む事故の原因となったマレイ人親子を泣きながら責めたていて彼を抱きかかえ起こした。そして、なんとかエンジンが始動した単車の後部に彼を乗せて歪んだハンドルにもたれるようにふらふらと試験場に辿り着いた。試験場の皆が驚いて集まってきて、そのまま病院へ運ばれたこと。やがて二人は回復し、再び仕事を始めた。あのシャルディンは今、どうしているのだろうか。思い起こすと頬が熱くなる。

私は今、何故、今西文庫がこれほどまでに私を引き付けるのかが分かったような気がする。それは恐らく、未知への挑戦と、その体験を通してのみ得られるフィールドワークの面白さと意外性、そして自然の威厳に対する生物としての人間の無力さと小さな勇気が私の体の中で新たな創造力を掻き立てるからではないかと。あの今西錦司を育んだ京都の気風と風土が、同じ地で多感な青年期の十数年間を過ごした私にも時知れず宿っているのだろうか。図書館のこの小さな空間が私にさらなるロマンの夢へと誘うのである。

(ほりうち たかつぐ：留学生センター長 農学部教授)

# ヨーロッパの大学及び図書館視察報告 (1)

アテネ工科大学 (ギリシャ)・リエージュ大学 (ベルギー)



附属図書館情報管理課長 細戸康治

## はじめに

平成14年3月2日から10日までの9日間、ギリシャ、フランス及びベルギーの大学の状況について調査する機会を得た。

現在、21世紀教育新生プランにおいて「世界水準の大学づくりの推進」が謳われており、大学を核とした3つの改革(世界最高水準の大学づくり、人材大国の創造、都市地域の再生)が進められている。それらをふまえて独立行政法人化後の大学の組織体制のあり方、外部資金の確保のあり方等、検討すべき課題が山積している。

また本学附属図書館においては、医学部の統合移転にともなう図書館増築の検討、図書館機能強化策(電子ジャーナルの導入による研究支援の強化・学習支援・遡及入力)を推進している。

これらの事業を押し進め今後の図書館運営に資するために、海外の大学でこれらの課題に対しどのような取り組みがなされているか調査することが、今回の訪問の目的であった。以下に今回の調査結果を報告する。

## 訪問した機関

今回調査のため訪問したのは、以下の大学及び図書館である。

### アテネ工科大学

ETHNIKO METSOVIO POLYTECHNEIG  
(National Technical University of Athens)  
Polytechnioupoli, Zografou ,15780Athens

### リエージュ大学

UNIVERSITE DE LIEGE  
(University of Liege)  
Place du20-Aout7 4000Liege

## 調査内容

- ① 訪問国の教育・文化・経済について  
どんな国なのか(統計数値と実地調査の観点)
- ② 訪問機関と岐阜大学との比較調査について  
学部数・学生数・教官数等の規模から
- ③ 大学の組織体制：アテネ工科大学の実情
- ④ 研究協力体制について：アテネ工科大学の実情
- ⑤ 大学における図書館活動について：  
アテネ工科大学、リエージュ大学
- ⑥ ハドリアヌス図書館について：  
ローマ時代に創建された図書館の遺構を見て

## まとめ

- ① 資源の少ない国家ほど、教育への投資額が多い。特にベルギー、ギリシャは高等教育に重点をおき、人材大国の創造を目指していた。
- ② 訪問した大学図書館と本学図書館の所蔵する外国文献の質・量を比較すると、当然のことではあるが、相当な差がある。外国語の文献を読み、理解し、外国語で考えをまとめ、発表出来ることが今後ますます重要となってきており、国内図書と併せて、外国文献の充実も本学図書館にとって大きな課題である。
- ③ 理事会のもとに、研究と大学運営に関する委員会組織があり、学長補佐体制として財務担当と学術担当の副学長がおかれ、その下に学部・研究室等がある。意志決定のプロセスが効率化されているような印象である。
- ④ 産学連携の取り組みは、アテネ工科大学・リエージュ大学とも、非常に進んでいた。ニーズを的確にとらえた研究を行い、それを学外に還元し、さらに新たな研究費を確保するというサイクルの研究体制が定着していた。また大学で蓄積された知的資産を効果的に学外にプロモートすることにおいても相当進んでいた。
- ⑤ 電子ジャーナル導入の取り組みに重点がおかれていた。学生等の体格による規格の違いからなのか、見学した図書館は非常にゆったりしていた。
- ⑥ 日本ではまだ神話の時代に、ギリシャには岐阜大学の図書館よりも大きな建物の図書館がすでにあった。現在もその在りし日の建築の壮麗さが想像できる遺構が残っている、ということに大きな驚きと感銘をおぼえた。

今回のギリシャ、フランス、ベルギーの訪問ではグローバル・スタンダードという観点から大学及び図書館の有り様について多くの事を学んだ。このような機会を与えられたことに深く感謝する次第です。

## 平成14年度の活動記録（利用者サービスを中心に）

- 4月1日～ 図書館機能強化経費を用い、電子ジャーナル Science Direct(自然科学系を中心とした全分野)、ProQuest(医学)を導入し、雑誌をオンラインで提供することにしました。(15年3月現在：電子ジャーナル約2,000タイトル)
- 4月7日 電子ジャーナルの導入等図書館サービスの急激な変化に対応するため、速報誌「図書館ニュース」を3月14日に創刊しました。第2号は新入生を主な対象として「文献の探し方を身につけよう：文献入手13条」と題して発行しました。
- 4月8日～ 新入生を中心にした図書館ツアー、図書館入門ガイダンス及び教官からの申出に対応した図書館ガイダンス(学部への出張説明も含む)を実施しました。延べ25日、423人が図書館利用の説明を受けました。小冊子「文献を探す、図書館を使う」を作成しました。(授業と連携した図書館ガイダンスについては、図書館HPをご参照下さい)
- 5月8日 学生用図書を教官が年1回選定する仕組みから、図書館で毎週選定することとしました。毎日刊行される本の刊行状況に合わせた選書で、蔵書構成の適正化を図ります。図書館内に設けた選定WGの選定を元にして、教官から随時推薦を受け、その他、重点選書等を加え、重層的な選書を行う。これらの選書・推薦を元に、平成14年度中に資料選定委員会を4回開催し、3,000冊強の選定を行いました。(第41回資料選定委員会等)  
また、新着図書の配架に関し、表紙を見せる展示などの工夫を加えました。  
新聞記事データベース朝日新聞記事索引(DNA)と世界の雑誌目次データベース Knowledge Workerを導入しました。(第129回附属図書館委員会)
- 5月15日 医学部分館が、東海地区医学図書館協議会の会長館となり、日本医学図書館協会の幹事館となり、平成14～15年度は、医学部分館が東海地区の医学図書館界の取りまとめをすることになりました。
- 5月30日 学内複数部局との連携により、化学関係の世界的データベースである SciFinder Scholarを導入し(6月1日から)、利用者説明会を開催しました。
- 6月12日 電子ジャーナルをあまり使わない分野の教官に対する支援方策の検討を開始しました。(第130回図書館委員会～)
- 7月1日 館内を全面禁煙にし、喫煙を認めていた休憩室(3階)を禁煙のグループ学習室としました。広い玄関ホールを情報ある空間にするため、本学に関する新聞記事のコピーと雑誌目次(特集内容)のコピー掲示することを始めました。本学に関する記事について追加の申入れがあったりし、目次のコピーを見て雑誌に関心を向ける学生が増える傾向にあります。また、展覧会ポスターに関しても、送られてくるものだけでなく、魅力ある展覧会ポスターを送ってもらい掲示することとしました。
- 7月16日 学生用図書リクエスト、それとは別に、学生が授業中に教官から紹介のあった本を要求できる制度及び「意見箱」を整備し、学生の意見・動向を図書館サービスに生かす仕組みを整えました。書評で知った本、授業中に教官から紹介のあった本などのリクエストが増えています。
- 7月22日 当館を幹事館として、岐阜大学図書館協議会総会・研修会を開催しました。情報リテラシー教育に関する議題を中心に今後の活動方針を協議しました。  
1日当たりの入館者が2,766名で、新記録となりました。

- 7月23日 学部から要請のあった中日新聞 Web 版、一般誌も含む雑誌論文索引の「ジャーナルインデックス」、雑誌引用度を調査する JCR の導入を決定しました。
- 7月30日 当館を幹事館として、東海地区国立大学図書館協議会総会・研究集会を開催しました。東海地区加盟館においては、他の大学図書館を利用する際、これまで行ってきた紹介状持参を廃止し、学生証提示で利用できることを申し合わせました。
- 8月7～8日 オープンキャンパスに図書館見学者446名（うち23名は保護者）が図書館を見学しました。  
・21～22日
- 9月5日 附属図書館増改築後における各階・各コーナーのゾーン計画（第1案）を作成しました。
- 10月1日 学術文献の世界的規模での入手に対応するため「グローバル ILL」に加入しました。
- 10月15日 平成16年4月からの独法化に対応するため「資産台帳」の作成に取り掛かりました。
- 10月23日 独法化後6年間のサービス目標を示した「中期目標・中期計画」を決定しました。（第133回図書館委員会）
- 11月1日 館長選挙により、正村静子附属図書館長が就任しました。
- 11月25～29日 閲覧席の照明状況改善のため、机上照明灯120台を取り替えました。
- 12月1日 分館長選挙により、清島満医学部分館長が就任しました。
- 12月26日 全学共通教育運営委員会で、図書館にパソコン26台増設が決定しました。
- 1月7日 医学部移転後の医学情報・資料サービス案について説明し、よく使われる学生用図書6,000冊と新着雑誌400タイトルを本館に移すこととしました。（平成14年度第8回図書・紀要編集委員会）
- 1月14日 散読室が、カーペット取替えと個別冷房の設置で一新したので、多様な用途の検討を開始しました。
- 1月17日 増改築後の生涯教育に資する図書館機能の展開について、田阪茂樹生涯学習教育研究センター長にご意見を伺いました。  
増築に関し、教育学部郷土資料博物館を見学し、担当の伊東久之助教授、小井土由光教授にご意見を伺いました。
- 1月23日 当館を当番館として、国立大学附属図書館事務部長会議を開催し、図書館員のスキルアップ等について協議しました。
- 1月29日 松井辰彌・平林芳夫元館長に図書館を再訪願いました。館長が、増改築後の図書館サービス政策を立案するため、附属図書館の発展経緯と今後についてお話を伺いました。
- 2月5日 財団法人誠仁会、学校法人誠広学園から奨学寄付金をいただきました。
- 2月12日 今年度から導入した重点選書として、今年度は、語学学習用 CD 付きテキスト、利用の多い化学関係書、楽しい図書館にするための視聴覚資料（CD,DVD 等）を充実することとしました。
- 2月17日 鈴木祥一郎元医学部部長の聖書注釈書を中心とした蔵書の受入れについて検討を始めました。
- 3月25日 3階へのメイン階段を上った所に、「新着図書コーナー」を新設しました。毎週50～100冊の新着図書が並ぶ予定です。
- 3月28日 CD/DVD プレーヤー5台が増設された。  
パソコンフロアに25台のパソコンが増設されました。
- 4月1日 附属図書館報告「寸胴」第33号を刊行します。今後、年に3回刊行の予定です。

お知らせ

ここが

図書館明るく、きれいに、便利になりました。

全館の  
閲覧席の  
蛍光灯が  
新しくなりました

CD/DVD装  
置の増強

新着  
図書コーナー

3階



全館のカーペットが新しくなりました

散読室が  
リニューアル



2階



情報端末が  
40台に増え  
ました



さらに電子ジャーナルが大幅に増えます。  
・Science Direct (Elsevier) 1450タイトル ・Springer Link 420タイトル ・ProQuest 400タイトル  
・Nature 姉妹紙も含めて14タイトル を中心に約2,800タイトル